

品目別レポート（りんご）

■品目説明

内閣官房に設置された農林水産業の輸出力強化ワーキンググループによる『農林水産業の輸出力強化戦略（平成28年5月）』では、りんごの輸出に関する現状・課題として「輸出拡大を図るには、香港、台湾の富裕層の需要だけでなく、中間層向けや、タイ、ベトナム等新興国の富裕層向け等、輸出先国・地域と輸出ターゲットを明確にした戦略的な需要開拓が必要」「輸出相手国・地域ごとに異なる輸出環境課題があり、各々の残留農薬基準等をクリアすることが課題」と指摘し、「これまでとは異なる新たなターゲットに向けて戦略的にプロモーション活動を強化し、伸びゆく輸出の更なる拡大を目指す」とうたっている。今後の取り組みとしては、「新たな市場を開拓するためプロモーション活動を強化」「高まるニーズに対応した生産体制を強化」「輸出を円滑に進めるための環境を整備」を行うとしている。

19年産りんごの国内収穫量は70万1,600トン（前年比7.2%減）、出荷量は63万2,800トン（前年比6.9%減）となった。都道府県別にみた収穫量割合は、青森県が58%、長野県が18%となっており、この2県で全国の8割弱を占めている（農林水産省「作況調査（果樹）第1報」）。輸出品種は、ふじ、世界一、むつ、王林などである。

りんごの小売り売上規模（2019年）は全世界で6,192万2,000トンとされており、地域別にみると、アジア大洋州3,948万1,000トン、西ヨーロッパ692万トン、中東・アフリカ451万3,000トン、東ヨーロッパ413万7,000トン、ラテンアメリカ344万6,000トン、北米319万2,000トン、オーストラレーシア（注）23万4,000トンである（ユーロモニター・インターナショナル調べ）。

注：オーストラレーシア：オーストラリア大陸・ニュージーランド北島・ニュージーランド南島・ニューギニア島およびその近海の諸島（インドネシアの領域を含む）を指す地域区分。

■貿易概況

19年のりんごの輸出額は前年比5.7%増の1億3,286万ドルと、1億ドル台を維持した（表1）。輸出货量は同4.8%増の3万5,888トンとなった。輸出相手国・地域1位の台湾は、輸出額が同3.3%増の9,085万ドル、輸出货量は同3.5%増の2万4,706トンで、台湾向けは全輸出額の68.3%、全輸出货量の68.8%を占めている。2位は香港で同11.9%増の3,345万ドル、輸出货量は同7.8%増の9,124トンとなった。りんごの輸出货量は台湾と香港向けで全体の94.2%を占めており、同国・地域が日本にとって重要な市場となっている一方、今後さらなる輸出先の多角化が期待される。3位のタイは408万ドル（同15.9%増）、1,094トン（同9.9%増）と好調。4位ベトナムは203万ドル（同5.8%増）、334トン（同4.0%増）と堅調に伸びている。同国では、15年9月に日本産りんごの輸出が解禁された。東南アジア諸国は、りんごの栽培条件である平均気温上限14度を上回る地域で、りんごの栽培には不向き。このため、ベトナムを含む同地域は、農林水産省の輸出戦略においても潜在的なマーケット

として有望とみられている。

▼表1：日本のりんご輸出

(単位：ドル、トン、%)

	2017年		2018年		2019年		前年比	
	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量
台湾	69,145,395	20,675	87,984,560	23,875	90,853,305	24,706	3.3	3.5
香港	21,830,860	6,652	29,886,519	8,461	33,452,513	9,124	11.9	7.8
タイ	1,969,556	493	3,527,706	995	4,089,524	1,094	15.9	9.9
ベトナム	1,251,060	207	1,922,532	321	2,034,659	334	5.8	4.0
シンガポール	568,089	158	757,489	206	986,128	272	30.2	32.0
全世界	96,903,989	28,724	125,686,225	34,236	132,868,276	35,888	5.7	4.8

注：対象はHSコード 0808.10

出所：Global Trade Atlas (IHS Markit) より作成

■海外事情

●台湾

▼表2：台湾のりんご輸入

(単位：ドル、トン、%)

	2017年		2018年		2019年		前年比	
	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量
米国	80,964,732	58,132	57,366,030	39,924	83,003,839	65,815	44.7	64.9
日本	63,311,738	21,436	69,061,806	22,935	69,852,058	24,664	1.1	7.5
チリ	71,869,565	53,338	70,313,855	50,186	51,245,190	41,677	△ 27.1	△ 17.0
ニュージーランド	37,485,170	23,688	36,778,601	22,114	31,778,925	19,163	△ 13.6	△ 13.3
南アフリカ	8,380,208	8,256	5,860,494	5,467	5,017,339	5,298	△ 14.4	△ 3.1
全世界	266,665,844	167,402	242,938,442	142,570	244,072,702	158,721	0.5	11.3

注：対象はHSコード 0808.10

出所：Global Trade Atlas (IHS Markit) より作成

台湾における19年のりんごの輸入は、金額ベースで2億4,407万ドル（前年比0.5%増）、数量ベースで15万8,721トン（同11.3%増）であった（表2）。19年の主要相手国からの輸入動向をみると、米国（8,300万ドル、6万5,815トン）、日本（6,985万ドル、2万4,664トン）、チリ（5,124万ドル、4万1,677トン）、ニュージーランド（3,177万ドル、1万9,163トン）などとなっている。日本は、金額ベースで米国に次ぐ2位、数量ベースで3位となった。

台湾でもりんごは生産されているが、02年1月の世界貿易機関（WTO）加盟後の輸入自由化で輸入りんごの価格が大幅に下がり、国内生産は02年の9,650トンから19年には1,178トンにまで大きく

減少した（行政院農業委員會「動態查詢」）。その結果、国内需要のほとんどを輸入に依存するようになっている。なお、ピーク時の1979年には2万1,828トンが生産されていた。りんごの輸入は10～11月が米国産、11～3月が日本産、3～6月がニュージーランド産、6～9月がチリ産と、季節ごとに産地を変えて周年供給されている。

直近6年間の数量ベースでの輸入相手国は、米国産とチリ産が常時1位、2位を占めていた。為替動向の影響を受けやすい日本産は3位から4位を浮沈してきたが、福島第一原発の事故などに伴う影響を克服し、13年以降数量面で安定的に推移している。日本産はサイズが大きく、色も真っ赤で形も丸く、お供え用やギフト用などとして根強い需要があったことがその要因とみられる。

一方、有力競合国ニュージーランド産の輸出攻勢が14年以降目立った。これは、台湾とニュージーランドが締結した経済連携協定（EPA）の発効により、生鮮りんごの関税20%が撤廃されたためである。ちなみに19年における主要国産の1kg当たりの輸入単価の動向をみると、日本産は2.83ドルと最も高く、次いでニュージーランド産は1.65ドル、米国産は1.26ドル、チリ産は1.22ドルの順で、日本産は競合国ニュージーランド産の約1.71倍と高価格帯であるが、台湾市場で広く受け入れられている。

また、ジェトロが2019年11月～2020年2月かけて台北市内で調査したところ、アップルミドル向けスーパーマーケットでは青森県産（弘前早生富士）が2玉で178台湾ドル（約647円）、青森県産（名月）が1玉109台湾ドル（約396円）、ローワーミドル向けスーパーマーケットでは米国産（グリーンアップル）が1袋4玉で72台湾ドル（約261円）、チリ産（ENVY）2玉96台湾ドル（約348円）であった。

日本人と台湾人では、甘味という点で味覚が異なる。例えばりんごは甘さと酸味のバランスが大切で、果物はただ味が甘いだけでは台湾では受け入れられないという特徴がある。

●香港

▼表3：香港のりんご輸入

(単位：ドル、トン、%)

	2017年		2018年		2019年		前年比	
	金額	数量	金額	数量	金額	数量	金額	数量
ニュージーランド	23,337,886	14,737	35,294,196	21,168	64,567,892	36,749	82.9	73.6
中国	61,625,370	85,588	71,962,188	90,405	61,576,834	73,059	△ 14.4	△ 19.2
米国	48,670,303	40,004	33,911,694	27,051	37,280,408	26,846	9.9	△ 0.8
チリ	8,735,430	6,667	10,629,175	9,136	31,988,846	26,145	201.0	186.2
日本	24,474,969	6,879	29,559,470	8,305	29,690,652	8,020	0.4	△ 3.4
全世界	182,083,477	165,089	198,118,606	167,093	252,222,821	188,940	27.3	13.1

注：対象はHSコード 0808.10

出所：Global Trade Atlas (IHS Markit) より作成

19年のりんごの輸入をみると、金額は前年比27.3%増の2億5,222万ドル、数量は同13.1%増の18万8,940トンであった(表3)。主要輸入相手国の動向をみると、上位3カ国の輸入額合計は全体の50.0%を占め、数量でも同72.3%と、大きなシェアを占めている。日本については金額ベースで前年比0.4%増の2,969万ドル、数量が同3.4%減の8,020トンとなった。

19年におけるりんごの1kg当たりの輸入単価は、引き続き日本産が3.70ドルと群を抜いて高く、他の中国(同0.84ドル)、米国(1.38ドル)、ニュージーランド(1.75ドル)、チリ(1.22ドル)のなかでも、中国産の価格競争力が目立っている。

日本産りんごは、数年前は贈答用の大きなりんごが多く流通していたが、近年は小ぶりのサイズで日常生活で食べるりんごも増えており、果物卸売市場や公設市場での小売店、ローカルスーパーマーケットでも広く販売されるようになってきている。元々他国産に比べ、甘さ、フレッシュな香りなどを備えていた日本産のニーズが増えた。

ジェトロが2019年11月～2020年2月にかけて現地市場価格調査をしたところ、富裕層向けのスーパーマーケットでは1個あたり、ニュージーランド産(ジャズアップル)1袋6個31.90香港ドル(約457円)、青森県産りんご(王林)4個68香港ドル(約975円)、青森県産(フジ)2個68香港ドル(約975円)であった。

本レポートに関する問い合わせ先：
日本貿易振興機構（ジェトロ）
農林水産・食品部 農林水産・食品課

〒107-6006
東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル
TEL：03-3582-5186

【免責条項】

本レポートで提供している情報は、ご利用される方のご判断・責任においてご使用ください。ジェトロでは、できるだけ正確な情報の提供を心がけておりますが、本レポートで提供した内容に関連して、ご利用される方が不利益を被る自体が生じたとしても、ジェトロ及び執筆者は一切の責任を負いかねますので、ご了承ください。